

中国出征兵士である祖父の信念のこと

山崎貴子（祖父から聞いた話）

祖父は外地にいた際、1人も殺していない。同じ人間である人を傷つけることはできない。上官に殴られても自分の信念を曲げなかった。現地の人と一緒に歌をうたったり、ふるさとの話をしたりした思い出がなつかしい。上海での生活は本当に楽しかった、と。孫ながら、戦時中の思い出を楽しめたと言える彼の背景を知りたくなり、軍歴も取り寄せました。

出征前夜、母に呼び出され、「必ず生きて帰ってきなさい」と言われたことを声をふるわせ涙ながらに話してくれたこともあります。「何があっても死んでなるものか」と自分に言い聞かせていたそうです。

上海では警備の任務についていたらしく、内緒で中国人の人を通過させてあげていたので、「謝意謝意」とペコペコしながら足早に通っていった。とも聞いたことがあります。

「孫の時代は隣国（中国）の人と良い関係を築くように、日本人の友人以上に彼らを大切にするように」と常に私に話してくれていました。祖父は私に平和を作り出すことを教えました。「ジジの時代でも、地元の人と仲良くすることができた。孫の代ならもっと簡単にそれができるはずだ。」と彼は言いました。

外地より夏休みをもらって広島に来ていた時、当時の彼女と「生きてまた会いましょうね」と言って別れた7日後に原爆が落とされてしまいました。祖父はその知らせを聞いた時に「もうだめだ」と思ったそうです。お酒を飲む度に悲しい顔をしていたのは、亡くなった戦友、当時の彼女を偲んでいたからでしょう。